

成果報告書

東京大学教養学部 4年 岩田優希

台湾の学生は非常にマイペースである。プレゼンテーションの準備を始めるタイミングや、宿泊施設の部屋割りの自己都合による変更、ぎりぎりに届く連絡の数々。すべてが計画通りに進むことを前提とし、「和」を重んじて集団の規律を乱さぬよう振る舞うことが求められる日本社会で育った筆者にとって、その自由奔放さには何度も驚かされた。その傾向は時に「迷惑」であるように感じられる場面もあったが、それと同時に、どこか羨ましくもあった。彼ら彼女らのマイペースさは、確かに集団行動においてはうまくいかない部分もあるかもしれないが、それでも、自分なりの意見をもって柔軟な選択を取るというのは、典型的な日本人である筆者にはなかなかできないことだからである。

また、台湾の学生のホスピタリティにも驚かされた。彼ら彼女らは、大学の授業期間中であり忙な日々を送っているにもかかわらず、プログラム外でもわざわざ時間を割いて我々に会いに来てくれた。また、豆花やタピオカなど台湾名物の食べ物を奢ってくれたり、路上で売られている台湾式のスクラッチ宝くじを体験させてくれたりと、我々日本人学生を歓迎するために手を尽くしてくれた。合宿中に行われたバーベキューにおいても、「客」である我々のために積極的に準備や調理の過程を仕切り、ポジティブな意味でのいわば「バーベキュー奉行」役を引き受けてくれた。そのような台湾人のおもてなしの精神に触れるたびに、東京五輪招致の際に話題となった「お・も・て・な・し」というスピーチが頭をよぎり、果たして日本社会の特質として紹介できるほど我々はその精神を有しているのだろうかと自信を失うほどであった。そして、台湾人学生のマイペースで自由奔放な行動も、このおもてなしの心や相手を気遣う気持ちと両立しているからこそ、ただの「迷惑」ではなく、「愛嬌」になり得るのだと思った。

さて、本プログラムにおけるテーマは「防災」であった。台湾では、福島第一原発事故が、地震や原子力発電を巡る社会の動向にさまざまな変化をもたらしたという。フクシマ以降、台湾では脱原発の議論が加速し、その結果、民進党の蔡英文政権において2025年5月には稼働中の原子力発電所がゼロとなった。現在の頼清徳政権においては原発再稼働への動きが見られるものの、いずれにせよ、フクシマを機に原発の安全性を巡る議論が大きく動いてきたことがわかる。また、訪問先の国家原子能科技研究院（NARI）でも、ドローンやヘリコプターを用いた原子力施設のモニタリング技術の開発のきっかけとして、フクシマの経験があると学んだ。近隣国とはいえ、「他国」での災害を契機として、社会の仕組みや技術開発に具体的な変化が生まれている点が、筆者にとって非常に印象的であった。

もちろん日本においても、防潮堤建設、住宅地の内陸や高台への移転、原子力規制委員会の設置など、3.11以降、防災に関するさまざまな取り組みが進められてきた。しかし日本の対応は、行政による制度や都市の整備に偏っている側面も否めないのではないか。

それらも重要ではあるが、しかし、台湾では、民間企業の柔軟な発想による防災への取り組みも見ることができた。特に、台湾の強みであるICTの防災への活用が、民間企業によって積極的に進められている。プログラム内で訪問した企業では、リアルタイムで共有された情報を可視化するデジタル避難マップや、災害時にLINEやWhatsAppといった日常的に使用されるアプリを通じて簡単に状況を報告できるシステムを提供していた。日本にもこのようなシステムを実現するポテンシャルは技術面においては存在すると考えられるが、それを社会全体で有効に活用するための仕組みづくりや、行政と民間の連携という点では、なお課題が残されているように感じた。

今回の一週間のプログラムを通して、筆者は、日本社会も、もっと自由な発想で、柔軟に行動してもよいのではないかという思いを強くした。台湾の学生たちのマイペースさと防災に対する民間を巻き込んだ社会全体の取り組みを短絡的に繋げる気は無いが、少なくとも筆者にとって、それらは既存の枠組みにとらわれずに新たな可能性を模索することの重要性のヒントとなった。だからこそ、この文章自体も、過度に形式ばらぬよう、自分なりの書きぶりで書き進めることを意識してきた。

筆者はこの春から東北地方をフィールドとして、メディアの現場で働き始める予定である。東日本大震災から年月が経過する中で、3.11の記憶をどのように次世代へと継承していくのかは、大きな課題の一つである。その際、日本国内で積み重ねられてきた制度的な防災の取り組みに加え、台湾で見たような柔軟で開かれた発想をどのように取り入れていくかが、一つ重要なカギとなるだろう。台湾との交流を通じて得た視点を手がかりに、防災分野における新たな可能性を模索し、それを自らの書きぶりで発信していくことが、自分にできる一つの貢献であると信じたい。本プログラムで感じた台湾人の相手を気遣った上で成立するマイペースさ、防災分野における知識は、来年度からメディアで働く者としての筆者に大きな影響を残すだろう。